

# 露伴〈天うつ浪〉考

日 沼 滉 治

## 一 はじめに

幸田露伴の小説「<sup>(そら)</sup>天うつ浪<sup>(う)</sup>」は明治三六年（二九〇三）の『読売新聞』九月二一日号から連載され、翌三七年二月一〇日号の百回で中断し、ふたたび同三七年一月二六日号から翌三八年五月三一日号まで連載されたなり、未完におわった。このあと露伴は創作から遠ざかり学人としての生涯にはいる。あたかも夏目漱石が学究から作家に転じた時期と重なっており、いわば漱石の文壇登場——『吾輩は猫である』（明38・1）39・8、『ホトトギス』八巻四号〜九巻一一号）と交代して文壇から途中退場したのが露伴「天うつ浪」の経緯であった。

この小論は、露伴の未完の「天うつ浪」の構造を探る糸口を作中人物の五十子<sup>いそこ</sup>にもとめ、曲亭馬琴『南総里見八犬

伝』および唯識論とニーチェ F.W. Nietzsche 『ツァラトウストラ』 Also sprach Zarathustra にかかわらせ、作品の方位軸・風流・詩的曼荼羅まんだらの問題に触れて、露伴が創作から退いた事情にいささか及ぼうとするものである。

## 二五 五十子

小説の端緒は、明治の早いころ七人の青年が下野国宇都宮の二荒山神社に集まってそれぞれの志を誓い、つぎつぎに上京したことにある。作品の「其一」は、遠洋漁業から帰った羽勝千造を迎えて一同が東京竹芝の海楼で盃をあげる場面にはじまる。ただし、七人のうち三人が顔をみせない。北海道にいる榎井と病氣の名倉は仕方がないとして、向島に住む水野清十郎が来ていない。詩人を志す水野は小学校の教員をしており、同僚の岩崎五十子に恋してしまった。五十子の病氣に気もそぞろなのだ、事情を知る相場師の島木万五郎が語る。

「其六」から「其百」の中断までの大筋は、その水野が腸窒チフス扶斯にかかった五十子のために奔走し回復にこぎつける話である。医療費百円の工面に苦しんで羽勝に頭はさげる、ひよんな縁から浅草寺でかたわらの老人が唱える『法華経』普門品ふもんぽんにはつきあわされる、引いてくれた籤くじは「凶」と出る、はては職まで失う。いずれ覚悟のことだったから、失職はよい潮時だったにしても、水野は五十子に徹頭徹尾きらわれており、これは島木も知らないことである。要するに、「其百五十七」で未完におわったこの小説の三分の二は、水野が五十子にキリキリ舞いさせられる話である。水野の思いこみは別として、はた目にはよくよく割りの合わぬ設定だったというほかない。

題名の「天うつ浪」および「其一」の宴、「其四十七」の魯敏孫漂流記の話題などから推すかぎり、同志の七人が海洋にかかわるはずである。が、わずかに「其三十」で相場師の島木が期米の売り買いで大いに当てて羽勝に船の資金を提供したと知れ、「其八十一」から「其九十一」にかけて羽勝が水野に海洋生活を勧める場面が見えるだけである。たしかに水野は重要な人物ではあるが、「其百」で作品が中断したあと姿を消している。直情漢の日向八郎も、島木・羽勝も、水野にやきもきしている限りでは脇役にとどまる。むしろ、五十子の継母のお関に三弦の内弟子として身を寄せるお龍が「其三十七」から姿をみせ、「其六十四」の出会いから水野を憎からず思いつつ中断以後へと橋渡し役をつとめる。中断以後、「其百一」から新たに登場するのがお彫である。筑波某という一代分限の外妾ながら、お龍を妹分として引き取り、旦那の筑波がらみで島木と暗闘にはいる気配があり、筑波とお彫とが待ち受ける葉研堀あたりの妾宅に島木が参入してお龍と対面する一瞬をむかえ、そのまま小説は未完に終わる。「天うつ浪」は目鼻立ちもつきかねる鳥羽口で筆を措かれてしまったことになろう。

しかし、未完は未完であるなりに作品の大枠を占う方途がないでもない。水野を奔命に疲れさせたまままで終始姿を見せぬ五十子の在りようである。

五十子は、「其百」までの水野物語にとって、台風の日である。隅田川の東岸の四つ木村に伏せたまま水野をきらいぬく。病いえた五十子がこのあと水野にありがとうの一つも言ったかどうか。作品の表に姿をみせぬまま、「其百」のあと急速に作品の焦点から遠ざかってしまうのである。そのころ東武線の始発駅は吾妻橋の東口にあった。「其六十七」で水野は、吾妻橋の停車場から鐘淵へむかう車中で今しがた足を踏まれて見知ったばかりのお龍にひきくらべ、

五十子の容貌を心中「端巖たんごんの相」として思い浮かべる。五十子はよくよく人間離れのした冷厳な存在として設定されていたことになろう。

五十子にかかわる水野の煩悶も尋常でなく、そういう設定を、露伴の筆力はともかくも作品に実現させているのである。たとえば「其三十五」などである。五十子の病気が急変したと告げられて駆けつけた四つ木の病家で、うしろの椎の老樹の幹に頭を埋めたなり、しかし水野は病人を見舞うことができないでいる。その時、老樹のつぶやく人声を耳にした、と小説は語る。いわく、

衆生被しゅじやうび困厄こんやく、無量苦むりやうく逼身ひつしん、觀音妙智くわんのんめうちりき力りき、能教世間のうぐせけん苦く (3)

そのあと、さらに、椎の大木が二つに裂け猛鷲あらわしと大蛇をしたがえた我が影を明らかに幻覚したとする。この幻聴と幻覚については、水野の心象の内容として後に改めて検討したいが、あらかじめ、五十子が不可思議の影をまとったまま物語を支配するという設定に注意したい。

### 三八 犬伝

五十子。訓のよみかたこそ違え、これは曲亭馬琴『南総里見八犬伝(4)』の人、伏姫ふせひめの母の名である。かつまた、作者馬琴が武蔵国豊島郡に設定した城として、のち里見攻め関東管領の本拠となったとされる、屈折のおおい名である。

八犬伝の端緒をいえば結城合戦にある。落武者となった里見義実は、神余光じんよ弘の旧領地である安房に足がかりを求

め光弘の逆臣山下定包を襲つて二郡を定めたのち、もと光弘の愛妾でいまは定包の妻におさまっていた玉梓を斬らしめた。いったん助命した前言をひるがえして、光弘の旧臣たる金碗八郎の忠諫にしたがったのである。しかし、八犬伝の厄難はそこにはじまる。「肇輯」の「卷之三」第六回および第七回の挿絵は玉梓の妖美と怨念を語るかのようであり、その時の玉梓の呪いがある場かぎりの恨み言でなかつたことを告げるのである。

怨しきかな金碗八郎、……汝も又遠からず、刃の錆となるのみならず、その家ながく断絶せん。又義実もいふがひなし、……児孫まで、畜生道に導きて、この世からなる煩惱の、犬となさん。

はたして八犬伝「肇輯」の「卷之四」第八回は、金碗八郎孝吉が故主に殉じて追い腹を切り、臨終の場で一子大輔と親子の名乗りをする悲話に始まる。が、馬琴の筆はとどこりなく、里見義実が上総国椎津の城主たる万里谷入道静蓮の息女五十子をめとつて一女と一男を得たことに及ぶ。だが、第八回はその冒頭の割り書きに次のような二行を示しており、八犬伝の大筋をなす伏姫と八犬士の因縁は、さきの玉梓の呪いをうけて、おおむねこの第八回に兆したといつてよからう。

行者の岩窟に翁伏姫を相す

滝田の近邨に狸雛狗を養ふ

伏姫の三歳までの在りようがすでに異様であつた。「物を得いはず、笑もせず、うち嘔給ふ」――。役の行者ゆかりの安房の洲崎明神に三年間代参をつかわした験もなく、いまは姫みずからを籠もらせる。その結願の日に、姫の行く末について行者の示しをうけて授かつたのが、仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の八字を彫りなした「水晶の珠数」で

あつた。「行者の岩窟に翁伏姫を相す」がそれを標しており、そのご姫は息災に成長する。一方、「滝田の近邨に狸雛狗を養ふ」はどうであろうか。数年後、長狭郡にひとつ子の牡狗が生まれた。母狗の死後は同郡の富山あたりからやってくる狸に四五十日ほど養われたという奇譚である。「八所の斑毛」のあるこの八房がやがて伏姫につかえ、ともどもに安房の富山の洞窟に籠もる。時節をへたある日、姫が『法華経』提婆達多品を讀経し終わった折しも、金碗大輔孝徳が放つた二つ玉の鉄砲に撃たれる。姫も倒れる。伏姫の身の清浄は明らかになるが、姫と八房の精は関八州にとび散る。大輔は義実の諭しをうけ「犬」の字を二つに裂いて「く大」法師と身をかえ、八つの徳目の水晶と牡丹の痣とを分け持った八犬士をたずねる。

のち「九輯」「卷之五十二」にいたる。伏姫は姫神であり観世音の化現であつたと言ひ遺して、大禪師は現世から身をかくし、『法華経』観世音菩薩普門品(5)がにわかには八犬伝の主題に現れるのである。

姫神は原是富山なる、観世音の化現なり。

「天うつ浪」における岩崎五十子をかえりみよう。その容姿と言動を露伴はついに語ることなく終わった。五十子を四つ木に籠もり伏せたまま『法華経』普門品をもって莊嚴し、「如何なる宿世の仇のありてか」、情こわく水野を苦しめつづける。しかも「天うつ浪」の「其四十九」く「其五十三」にかけて、露伴は、狗の遠吠えを「べうく」と聞かせる。そのまえ、すでに「其三十四」あたりの夕暮れに作者は、四つ木の子らに「鉄道唱歌」(明33・5、大和田建樹)を歌わせていたのである。

四十七士の墓どころ、雪は消えても名は残る、

正しくは「雪は消えても消えのこる……」であり、それは村童らの思い違いだとしておこう。つづく三番「……海のあなたにうすがすむ山は上総か房州か」が自然に思われ、隅田川がその東岸の東京府南葛飾郡四つ木村・寺島村に、まだ下総・上総・安房の残像をひいていた明治三〇年代の末である、当時の読者が、四十七士ならぬ八犬士の縁で遠吠えのかなたに『南総里見八犬伝』の世界を思っておかしくはなかったろう。

それにしても「天うつ浪」に隠見する八犬伝の隠微は異様である。二〇世紀初頭の「天うつ浪」がなにゆえ文化く天保期の八犬伝（一八一四く四一）と相渉らなければならなかったのであろうか。

そもそも「天うつ浪」の同志は七人であろう。八犬士の八人ではない。詩人を志す水野清十郎、相場師の島木万五郎、新聞記者の山瀬荒吉、陸軍少尉の日方八郎、遠洋漁業の羽勝千造、それに病氣の名倉、北海道にいる榎井——。かりに「化星七英将」から「八字文殊曼陀羅」へと（<sup>もんじゅまんたら</sup>）<sub>(6)</sub>いう縁で、八人めの同志を求めにしても、ほかに気鋭の男子は見あたらない。一代分限の筑波は論外として、島木と同宿の相場師で梅幸とあだ名される伊東も海洋に乗り出す柄ではあるまい。医師の尾竹と相良は別枠であろう。水野が下宿する山路吉右衛門も世を退いた人であり、浅草寺で『法華経』普門品を唱えた老人、これはお形の妾宅に奉公するお富の父ではあるまいかと疑わせるが、つまりは愚痴の人である。水野に退職をもちかけた校長の高田も行きずりの人にすぎない。わずかに、五十子の弟で数え年一七歳の松之助が姉の補助をうけて下谷の広小路のむかし乳母だった人の掛人になり、某校の給費生として水野を慕っており、八犬伝の犬江親兵衛仁、<sup>まさし</sup>幼名大八を思わせる。二荒山神社で誓った七人に岩崎松之助が遅れて一枚かむのではないかと疑われるのみである。

露伴の設定がすでに尋常でなく、五十子は四つ木の草屋に伏せつたまま八犬伝の伏姫とその母の五十子にどこか重なる。「天うつ浪」の構想に一度は八犬伝の五十子・伏姫の神異を重ねておきたいとするゆえんである。

#### 四 唯識論

水野、清十郎——。七人の男子のなかでひとり詩人を志した青年に、作者がそう名づけ、理財本位の島木に目の前でつぎのように述懐させたとおりに、水野の心性は根が清らかなものであつたらう。

其にも此にも頓着無く、若い身そらで色気も無く、下手な律僧は及ばぬ身持でたゞ學問に凝つて居る、ア、聖人と云うなあ彼様な男の事知らん、余所目から見では気が竭きて、何だか憫然なやうな気がすると、思つた位に月日を経て来た、其の汝の難行苦行も何の為だ。(其十八)

にもかかわらず、その献身にはなにか独り合点なところがある。その心熱は妄執じみている。島木や日向・羽勝が案じたとおりである。作者は、時として水野みずからにその妄執を省みさせている。日ごろの言説とうらはらに浅草の観音に日参させてもいる。

たとえば「其二十一」「其二十二」である。夜もすがら奔走して浜町の島木に頭をさげた足で蔵前の開業医相良を訪ねた帰り、浅草寺の境内に来かかつて思わず手を合わせる場面がある。かたわらで、老いたる人がたまたま『法華経』普門品を誦する。(其二十二)



惑漂流巨海、龍魚諸鬼難、念被觀音力、波浪不能没、

……妙音觀世音、勝彼世間音

おのずから心地の清められる思いがしたところへ、悪所からの朝帰りとおぼしい書生二人がさしかかって高笑いする。「吾輩の親分は、基督が代表した馬鹿思想を奴隷道徳と罵つたが、吾輩は法然日蓮の代表した馬鹿思想を乞食道徳と断言するが、何様だ、可からう。」

つづけて「其二十三」の冒頭に作者は、そのときの水野の心中を語る。

天の彼方に颯風を起し、ニイチエが真趣を実に知れりや、それも覚束無げなる書生の放言の、余りの事に傍痛くはおぼえたれど、意を動かすほどにも至らざりければ、他は他なり、我は我なり、関係無き禽の声の、それまでの事なりと聞き捨て、既に「ツアラツウストラ如是説」をも窺ひ読まぬにあらざりし水野は、しろりと冷やかりに彼の二人をば一瞥せしのみ止まりて、徐々此処を去らんと歩み出せば、

『法華経』普門品とキリスト教とニイチエの超人思想と。しかし、三者の出会う場が、なぜ浅草観音の境内でなければならなかったのか。心身ともに疲れきつた状況を丹念に設定し、地縁として浅草の観音へ水野をみちびく——。作者の心事を一度は疑つてよいだろう。島木や日向・羽勝のばあい、彼らの内面は時代物か世話狂言じみた壮語や切言となつて展開し、まま、長大な科白劇につき合わされた思いがする。ここでも、水野に藉口して『法華経』普門品の優位をあげつらおうとするのであろうか。しかし、小説の題名「天うつ浪」は、ここ「其二十二」の「惑漂流巨海、龍魚諸鬼難、……波浪不能没」や「天の彼方に颯風を起し、ニイチエ」に暗示されており、水野の信心も、信心にし

てはふつきれたところがない。改めて、水野の心象を吟味すべきだろう。たとえば――。

昨夜来の奔走、浅草寺の『法華経』、今日の暴風。ともかくも水野が授業をおえて山路老人の宿へ帰り（其三十二）、吉右衛門とお浜をあいてにくつろぐ間もなく、急を告げられて四つ木へふたたび駆けつけた「其三十五」を見よう。

我は今何なにとして来たりけん我知らず、我は今何なにとなさば宜からん我知らず、我はたゞ此処こゝに来では叶うはざるやう思ひて此処こゝに來り、我はたゞ此処こゝを去りがたき心地こゝちするばかりに此処こゝに在るなり。

すでに水野は惑乱し自失していたようである。が、デカルト René Descartes の「吾思う。故に吾在り。」Je pense, donc Je suis : cogito ergo sum（『方法序説』<sup>(9)</sup>）をどこかに思わせる惑乱ではあろう。

衆生被しゆじやうび困厄こんやく、無量苦むりやうく逼身ひつしん、觀音妙くわんのんめう智力ちりき、能教世のうぐ間苦せけんく<sup>(10)</sup>

水野が老樹のつぶやく人声をありありと耳にした、とするのはこの時である。むしろ、水野はこの幻聴をみずから退ける。退けるだけの聡さかしさを日ごろの修養によつて身に備えていた水野であり、退けさせたのは作者の露伴である。

愚おろかなり！、こは我が招よばずして我が記憶あはの現あられ来れるには過あぎざるものと、水野が冷ひややかに聞きし時は、其声は既に失せて遺響ひゞきも無かりしが、

幻聴は、今朝がたの『法華経』普門品の残響というものであったのかも知れない。水野もわが記憶が現れたにすぎないと冷めており、それだけの下地は浅草寺「其二十二」に用意していたのである。しかし、日ごろ『法華経』に縁などなかつた水野にしては並外れた記憶であり、作者はあえて水野がそらに聞いたとする。さて、それとは逆の幻覚をひきつづき現出せしめたところに注意したい。

当時そのとき椎の大木おほきは忽ち二つに裂けて、其処そこに明らかなる世界の朗らかに現れたるあらは中に、年齢は二十四五なる男の恋に寔れたる顔の勇威いきほひ無く光采ひかり無く、五月雨さみだれの檐のきの雫しづくと涙を放らし居れるさまの醜みにくきも醜みにくきを、右の肩には恐ろしき猛鷲あらわしを宿とまらしめ、後うしろには凄すさまじき大蛇だいじやを随へたる気味悪あしき大男の、神に似て神の威無く、人かと思れば人らしからぬが、憐れむが如く侮るが如き眼して見詰め居たるが分明ありありと見えぬ。(其二十六)

恋にやつれて醜く光采も勇武もないくせに、神一人ともつかず世を憐れみ世を侮る虚像こそ、作者が形象した水野のそのときの心象であろう。心象とはいう条、煩悶もしくは妄想であり、今朝がたの書生連中が言い放った妄言の遺響である。俗流のニーチェ理解が、かねて読んだ『ツアラツウストラ』<sup>(11)</sup>「序説」の猛鷲や大蛇の異相を借りて「神明は殪たふれたり」「仏陀ほとけは死したり」と羽音を響かせ、「神明かみは想像のみ」「仏陀ほとけは仮説のみ」とささやきかけたものであろう。ただし、ニーチェの「序説」が正午の晴朗な強さ聡しさを鷲と蛇に託したのにひきくらべ、水野の心象はニーチェ「幻と謎」第三部二章の二で牧人の喉奥にくいついた真夜中の蛇の暗さを帯びている。

水野がわれに帰り、暗涙をはらって心を奮いおこした瞬間の心象にも注意したい。「魔の如くに来り魔の如くに去る蝙蝠かほほり」が樹頭にひらひらと飛びかえるのを見たとするのである。神仏と、人智と。二た道かけて惑いきたったわが在りようを恥じて水野が自己本位に立つ。そのとき飛びかえった蝙蝠ことうもりは、なにを形象していたのであろうか。蝙蝠はなにか不吉をはらみながらローマ神話ミネルヴァ *Minerva* のフクロウ(12)を思わせ、この青年がこの先、詩人あるいは哲人として独往する艱難を思わせぬでもない。

我こ、に在り、我こ、に思ふ。思はるゝものの有り無しは定かならず、思ふ我の在る事が真実なるのみ。……我

こゝに思ふ！、我こゝに在り！

水野が「一文字口」<sup>いちもんじぐち</sup>をきびしく引き締めて「石人」<sup>せきじん</sup>のごとく立つたところで、しかし小説は「其三十七」以下、しばらくお龍をとりまく柔美な世界に転じてしまうのである。のち「其百四十二 眼病み男の二」の浜町の宿で島木あいてに、同宿の伊東がお形を評して「実にもう甚い化物」<sup>ひと</sup>「筑波の上を行つてる奴」<sup>やつ</sup>「白蝙蝠」<sup>しろこうもり</sup>という。島木とお龍を介して、水野の頭上の蝙蝠と葉研堀の「白蝙蝠」お形とは、どのように飛び交わろうとしたのか。未完の作品のゆくてにそれを求めるべくもない。ただ言えることは、明治の末年に青年たちを襲った思想の劇を水野に用意し、それを踊り場として「天うつ浪」の世界へ踏み出してゆく、これは作者なりの支度ではなかつたか、と疑われることである。往年の露伴にも水野に似た煩悶があつたからである。<sup>(13)</sup>

明治二三年（一八九〇）、おそらくは前年から兆していたことであつたらう。元旦から旅に出ようとしたが、易経やら浅草寺境内の籤やらでぐずぐずし一月中をむだに過ごしたことがある。原題「呵風流」および原題「風流魔」をめぐる創作の艱難は、この年にはじまつており、前者は明治三四年（一九〇一）の「二日ものがたり」完結まで持ち越され、後者は腹案・広告・序・記などをへて予告と習作をくりかえし、昭和二年（一九二七）に一応の決着を見た。いま、原題「呵風流」―「二日ものがたり」の西行に水野の心象を、また、原題「風流魔」の後身として安藤兵七―お浜の悲運にお形の経歴を配したいところがあるが、それは後に譲りたい。この年、露伴は六月三〇日から赤城山地獄溪にひと夏籠もり、一二月には筑波山入りして座禅をしている。露伴の没後に見いだされた「般若心経第二義注」（明23・8）によるかぎり、すでに前年から露伴が自意識の塵勞にまみれていたことは、ほとんど疑いえない。

その二年後に出た『真西遊記』（明26・3、学齡館）に就こう。児童あいての図書である。が、「賢哲大人豪傑」玄奘法師の「西遊の真実の記」を年少の読者相手に、二六歳の青年がムキになって説いた気配がある。呉承恩の長編小説『西遊記』を「西遊記流布本」「俗書西遊記」として斥けた後年の姿勢がすでにあり、<sup>(14)</sup>暗き往昔の遺物ともいふべき荒唐無稽の小説の西遊記など緇き玉はで、

と論している。チンギス ハン Chinggis Khan の招きで旅した長春真人の『西遊記』、道教の修行者邱長春の縁すらない。一言でいえば阿頼耶識——意識の根元の問題である。ひたすら『瑜伽師地論』を求める天竺取経の旅、唯識論を究めようとする玄奘の志操を説いた露伴であった。

五感五識にくわえて第六感が意識、さらに第七識の末那識は深層の執着、心—自我意識とされ、末那 manas 識の動揺がやむとき、各個人のいのちの根元「阿頼耶識」の世界がさらに深層の第八識として開けてくる、という。だが、いつさいの現象も事物も阿頼耶識—蔵識から縁起したものであるとするならば、阿頼耶識そのものが煩惱をすでに蔵しているのか、それともありのままに清浄なのか、そもそも縁起とはなんであったのか。<sup>(17)</sup>往年の露伴をおそった懊悩に照らせば、「天うつ浪」の水野を「其三十六」の椎の老樹の蔭に自立せしめたものは、唯識論という末那識にあたるものであつたらう。いわば近代的自我の根元、深層意識である。

我こゝに思ふ！、我こゝに在り！

ふたたび言う、水野は真に救拔されたのではあるまい。ミネルヴァのフクロウならぬ蝙蝠を頭上に飛びかえしたまま小説はいったん水野をはなれ、「其三十七」から「其四十四」まで脂粉柔美の世界に切り替わるのである。

## 五 ツアラトウストラ

犬は「べうく」と鳴くものであろうか。なにか漢字を当ててみたくなる響きが「べう」にはあり、字音語としての咆・猫・眇は野性と妖しさと遙けさを感じさせる。すでに作者は「天の彼方に颯風」（其二十三）を示し、「其二十七」に出来秋の暴風をよびこんでいた。島木万五郎の切所を助けた暴風である。いま、「其四十九」から「其五十三」にかけて、作者は犬の遠吠えを遠景において狗という表記をもちい、水野と祖父吉右衛門あいてに、魯敏孫にあこがれるお浜の願いと予兆を語らせる。

五十子さんは病気が癒つたならばネ、遠い遠いところへでも行つてお仕舞ひなさりさうな気がするのよ。而して其後で松ちゃんと妾とが一緒に泣くやうな事がありさうに思ふのよ。あの椎の樹の暗い蔭に、たった二人で淋しく残つて、泣くやうな事になりさうな気がするのよ。

そのころの尋常小学校四年を卒業した少女にしては幼い言いぐさではある。作者の長女の歌、数えて四歳の口ぶりを写したものであつたらうか。

あのネ、疇昔ネ、妾がずつと小かつた時——まだ三歳四歳で、妾の真実の御母さんが生きて居た時にネ、妾がお母さんに抱かれてうとくして居ると、遠くの方でもつて狗の鳴いたのが聞こえたのよ。

吉右衛門に「なんだエ、また下らない！。そりやあ気の所以といふものだは。」と打ち消させた上で、作者はまたも狗の声を「べうく」と響かせる。

今鳴いた彼狗は何様しても過日鳴いたのよ。過日鳴いた彼狗はまた妾が大変に小かつた時鳴いたのかも知れなくつてよ！ 而して何だか妾あ、妾の前の世といふ時にも、矢張り此様な淋しい晩に、やつぱり彼様な狗の声を聞いて、やつぱり妙な心持が為たやうな気が仕てならないのよ！

少女の頑是ない言葉だけに直覚が云わせているようにも思われ、祖父の吉右衛門も水野も、それぞれの物思いに沈むのである。

「実に思へば人は或事にあへる時」と地の文は水野の想いをたどる——、「かゝる事には往昔既に一度逢ひたることありし」と思われる心地のすることがないではない、すでに兼好は幾百年の昔に言ったではないか、

かゝることの何時ぞや有りしかとおぼえて、いつとは思ひ出でねども、まさしくありし心地のする。〔徒然草〕第七十一段〕

そのとき、みたび「べうく」と狗の長鳴き。まるで「我は方々の前の世より既に知りたまへる狗なるをや！」と告げるように聞こえてきた、と「其五十」は結ぶのである。

いったい作者は水野のどんな想念を描こうとしたのか。少女の口を借り、吉右衛門に気のせいとあしらわせ、地の文では無きにはあらぬ、偶然の事とすればそれまでなれども、と筆をついやし、「其五十二」に至つてようやく言う。

かつて我が読みし書の中に「幻と謎と」といへる一章ありて、其の幽怪神異の趣味は、骨身に沁みて忘れ難く、『ツアラトウストラ如是説』——。浅草寺境内「其二十三」の残響をうけて、いま確かに繰り展べられる長夜の思念である。ただし、ニーチェのそれとお浜の言葉と。

彼は考慮かんがへに老いたる人の言葉にして、これは何の思案も無き少女の言葉  
それにしても、と水野は思いをやめない。

彼は先づ思ひて後に狗の声を聞き、これは先づ狗の声を聞いて後に思ひ起せるの差異ちがひこそあれ、  
この暗合はどうしたことか、と水野は思念する。岩波文庫本（氷上英廣訳）によるう。ニーチェ『ツアラトウストラ』  
「幻と謎」の第三部二章はつぎのように伝えてゐる——ツアラトウストラは地中海航海のはじめ二日間はものを言わ  
なかつた。が、やがて夜の岩山を登つた經驗を語りだし、章の二にいたつてある想念を口にする。

さらに、わたしは言いつづけた。「見るがいい、この『瞬間』を！ この瞬間の門から、ひとつの永い永遠の道  
がうしろの方へはるばるとつづいてゐる。われわれの背後にはひとつの永遠がある。（中略）

——そしてまためぐり戻つてきて、あの向こうへ延びてゐるもう一つの道、あの永い恐ろしい道を走らなければ  
ならないのではなからうか、——われわれは永遠にわたつてめぐり戻つてこなければならぬのではなからう  
か？——」

今日かくれもない「永劫回帰」思想。その端緒をなす「瞬間」を口にしたとする場面である。すでに章の一のおわ  
りでツアラトウストラはつぎのように語り、「永劫回帰」に堪える勇氣——「運命愛」を表明していたのだった。

これが生きるということであつたのか？ よし！ もう一度！

理想社の『ニーチェ全集』第九巻の『ツアラトウストラ』（吉沢伝三郎訳）は五百ページ強の訳文に三百ページちか  
い訳注、二六ページの解説、二二六ページの索引をとまなう。その訳注によると、永いことヨーロッパ文明は神が定



めた始めと終わりのある「時間」に支配されてきた。しかし神は死んだ。いつさいの終わりと死を無意味にする永劫回帰のニヒリズムを、だが、強者の「瞬間」として身にひきうけよう。それがツアラトウストラの決意、たそがれから夜にかけて「重力の魔」にさからいつつ登高した彼の、決意であったという。訳注によれば、「たそがれ」とは、いつさいの理想が理想喪失の闇へとしだいに沈みゆくことであり、「重力の魔」とは、超人の自己超克に避けられぬ抵抗であった、という。超人は、快活にたわむれる子供のディオニソス的な境地を志す。その意志と行為とに避けられぬ抵抗が「重力の魔」であった、というのである。

ツアラトウストラが身近かに犬が吠えるのを聞いたのは、彼が「永劫回帰」思想の頂に立った、その夜であった。「天うつ浪」にいう、「彼は先づ思ひて後に狗の声を聞き」にほかならない。そのときツアラトウストラは思い起こす――。

犬がこんなふうには吠えるのを、いつか自分は聞いたことがあったのではないか？

わたしの思い出は過去にさかのぼった。そうだ！ 子どものころ、遠い遠い昔に、

これらツアラトウストラの洋上の言説を、作者露伴は狗の声と少女お浜の不安を背景に形象し、詩人水野の長夜の思念として展開したのである。つづく「其五十二」では、「永劫回帰」思想の高みに登る水野の恐怖をその夜の悪夢に託し、「天うつ浪」の行方を諷したかに思われる。夢に登高する水野は、僚友の日向・島木・羽勝と相失い、その肩先にのしかかる肉塊ともいふべき妖精の重力に耐え抜く。

爾なんじ、水野！ おろかにも爾の思ひあがれるよ。爾、智慧の石！ ……水野、爾高くも高く石を投げたるよ、され

ど其はたゞ爾が頭に落ちて返らんなり。

妖精はささやきかけ、路の辺に病む五十子は面をおおう、助け起こそうと手を触れるか触れぬかに、たちまち妖精はあざけりののしり、身は「石人」のように大地に埋もれおぼれてゆく。この「石人」とは、「其三十六」四つ木村における水野の像であろう。妖精は、水野の裡にわだかまる煩惱でもあったろう。と、そのとき羽勝が鉄腕すさまじく頭髪を引きつかんで光ある世にふたたび投げ上げてくれて悪夢からさめるが、またも水野は四つ木から医師のもとへとさすらい、浅草観音の普門品につきあつて「凶」の籤を引き当てる。作者は依然として、水野を末那識の無明長夜をさまよわせていたようである。

## 六 詩的曼荼羅

顧みるに「天うつ浪」には、なお片づかない問題が残っている。まず、方位軸に偏りがある。つぎに、「風流魔」「呵風流」の問題をひいている。最後に、水野の叙事詩を含んでいる。

この小説の地上の舞台は、鐘淵・四つ木・寺島・吾妻橋・浅草・並木・蔵前・浜町・薬研堀・竹芝の浦——。せいぜいが下谷広小路。隅田川をはさんだ下町と川向こうに尽きる。方位軸でいえば、発端が宇都宮の二荒山神社にあつて日光の華厳世界を思わせ、補陀落水系の縁で竹芝の浦から東京湾に出てやがて洋上へ乗り出す気配がある。場面も方位軸も、首都東京から見て鬼門の丑寅—東北に偏し、南北の水系に走る<sup>(19)</sup>。

すでに近代説話の世界であろう。説話の群像を左右する質の問題でもある。まず、官員さんなる者が出てこない。一代分限の筑波の正妻がわずかに某子爵家の姫君という設定であり、陸軍少尉の日向八郎を官員さんとすれば、話はまた別であろう。しかし藩閥にも学閥にも、官権威力にも縁のない無名の青年たちである。立身を誓い合ったが、いずれ近代日本の仕組みからはじき出されるか、自立するかしかないとすれば、信じがたい事ながら、水野とお彤とはもと資質を同じくしていたことになる。いわば、露伴文学における風流の両極である。ただし、両者が、お龍と島木とを介してどのように相渉るのか、うかがい知ることはむずかしい。わずかに、「其百三十六 白鷺楼の一」から「其の百四十 白鷺楼の五」にかけて、お彤に引き取られたお龍が春の朧夜に白鷺の画の下でうつつともなく思案する。白鷺は、可憐な女性が妖女に変貌する危うさを孕んでいるとされる。<sup>(20)</sup> それは、水野のフクロウや猛鷲・大蛇と見合うものである。閉居・遊行の詩人肌と、軽俠可憐な佳人と。まったく相容れない「呵風流」と「風流魔」とが、「天うつ浪」にもつれ合い<sup>な</sup> 緋い合わせられた趣がある。あえてニーチェ風にいえば、風流におけるアポロンの apollonisch とディオニユソスの dyonysish <sup>(21)</sup> ふたつの相である。

浅草の観音がその結節点に再三姿を見せるのは、八犬伝『法華経』へ寄せる説話作者の思い入れであろうか。しばらく、露伴の風水とでも言うほかあるまい。兄の郡司成忠も露伴も向島に住んだ。郡司の北千島屯田の航は、向島で決行された。おそらく「天うつ浪」の構想と無縁ではあるまい。そもそも露伴の母の猷<sup>ゆ</sup>は房総半島の久留里に縁がある。<sup>(22)</sup> 八犬伝における五十子の里、上総国椎津の万里谷入道静蓮の城下にほかならない。露伴の小説「落語 真美人」(明23・1)も、伏姫の籠もったとされる富山<sup>とみさん</sup>の幼女をヒロインにしている。「血紅星」(明24・6)では、皆非居士なる詩作

三味の増長慢が安房の雁行山に閉居する。いや露伴自身、借金の保証人となって房総に身をひそめたことがある。

金竜山浅草寺はもと聖観音宗総本山として、推古天皇三六年（六二八）に宮戸川、いまの隅田川から一寸八分の黄金観音像をえて奉安したことに始まる。明治仏教の在りようが今一つはつきりしない現在、推断はひかえたいが、旧幕臣の子弟を含めた旧江戸市民にとって、浅草の観音さまは江戸根生いの仏像であつた<sup>(23)</sup>。知られるように、露伴の家は日蓮宗を宗旨としており、『法華経』なかんづく観世音菩薩普門品第二十五は、久遠の本仏が観音菩薩として現れて危難の衆生を救済することを述べたもの、とされる<sup>(24)</sup>。また、その提婆品第十二は、八犬伝の伏姫が誦しおわって倒れたとされたように、後半に畜生龍女の成仏を現じており、そこに作者馬琴の用意と構想とがあつたろう。女人成仏とは、変成男子<sup>(25)</sup>のそれではなく、女人が女人ながらに成仏することと、こんにち注釈家に解されている。あるいは、『法華経』提婆品第十二の畜生龍女の成仏説話は、「呵風流」の水野と「風流魔」のお形お龍の世界をふたつながら救いとめる成案でありえたかも知れぬ。一つの臆説として、北村透谷の伏姫論「処女の純潔を論ず」（明24・10・8、白表紙『女学雑誌』第三二九号）と対比させたい。

しかし露伴の風流は今一つ、思念と行動の問題をとまなう。「天うつ浪」のばあい、それは水野と羽勝の両極に代表され、いずれツアラトウストラさながら真昼の外洋に航して孤島に屯田するという経過<sup>(26)</sup>が予想されよう。「其五十二」における水野の悪夢は、少なくとも水野のうちに思念と行動の揺れがあつたことを暗示するものであつた。水野の揺れは、作者露伴の閉居・遊行の問題であつたかも知れない。現に「天うつ浪」が「其百回」でいったん中断したその時期、三月一五日から一二月末日にかけて長詩「心のあと 出廬」が同じ『読売新聞』に連載され、翌三八年一月一

日に春陽堂から出版されたとされる。

小説「天うつ浪」中断 明37・2・11〜11・25

長詩「心のあと 出廬」 明37・3・15〜12・31

小説中断の穴を補うものではあつたらう。しかし「心のあと 出廬」の露伴は出廬してどこへ赴こうとしたのか。長詩『出廬』三三二一ページ<sup>(26)</sup>もまた詩集「心のあと」の序詩<sup>(27)</sup>とされたまま、詩集全体は未完に終わった。一方、小説「天うつ浪」の場合は「其百」まで五十子が不在である。「其百一」からは水野が不在である。そして未完に終わった。筆を措いた事情については、作者の説明がある。<sup>(28)</sup>日露戦争と兄郡司の生死不明とが脂粉の気の濃い世界を書き継ぐことをひかえさせた、という。しかし、作者の内面の劇が皆目わからない。そもそも、小説も詩も含めて、露伴はなぜ創作から退いてしまったのか。

その劇を垣間見るためにも露伴の詩業、およびその叙法―たび重なる中絶と習作を事ともせぬ、連環・聯話・連句形式への志向を顧みるべきであろう。微塵にして一切、一切にして微塵なるものが阿頼耶 *avaya*―蔵であるならば、すでに露伴の微塵蔵は発端におびただしい宇宙を蔵しており、いつ中断してもいい。叙法は叙事詩のそれに近いようである。さしあたり長詩『出廬』には、さながら曼荼羅を見る趣がある。古事記・万葉集・古代中国の女蝸氏の神話・古代インド天人五衰の仏説と神話と。辺境と塞外から文明そのものを問い直した概があり、これは、ほとんどニーチェの『ツアラトウストラ』に拮抗する世界ではないかと疑われる。

こんにちニーチェ思想について、その明治移入史はつぎの二著に尽きるとしてよいだろう。

西尾幹二『ニーチェ』第一部（昭52・5、中央公論社）

高松俊男「日本におけるニーチェ移入史」（『大阪文学』復刊一―号、昭44）

いま西尾著の「序論 日本と西欧におけるニーチェ像の変遷史」、特に注(1)―(7)によれば、ニーチェの生前すでにその思想の一端は日本人の手で紹介され、一九〇〇年（明33）八月二五日の死後は諸家の論があいついだとされる。さて露伴のばあい、ニーチェ理解がいかなる外国の文献と翻訳によったものか、それは今後の課題であろう。ともかくも、露伴のばあいは時文の類ではなく、作品として形象しており、作者自身つねづね中国文明の辺境から塞外、さらに西域から古代インド・中央アジアに関心を寄せていたことに照らして、<sup>(29)</sup>ザラスシュトラ Zarathushtra 思想あるいはゾロアスター Zoroaster 思想<sup>(30)</sup>からニーチェ『ツアラトウストラ』に注意を向けていったのではないかと猜せられるものがある。しかし、この小論は「天うつ浪」に主題を限った。それらは、今後の主題でなければならぬ。

## 注

(1) テキストと回の数え方とは、昭和二四年版の岩波書店『露伴全集』第九巻によった。なお単行本『天うつ浪』（第一―明39・1・1、第二―明39・6・15、第三―明40・1・1、春陽堂）を参照。

(2) 「天うつ浪」の梗概や「露伴の直話」、その前後の事情については、柳田泉『幸田露伴』（昭17・2・12、中央公論社）、「天うつ浪」  
「心のあと」そのほか」参照。

また、魯敏孫漂流記の移入については、

木村毅「ロビンソン・クルーソー移入考」（『比較文学新視界』〈松蔭学術研究叢書〉中篇 第二章 二、昭50・10・20、刊行 松蔭

女子学院大学学術研究会、製作発売 八木書店) 参照。

柳田泉「翻訳文学編 解題」二、「魯敏遜漂流行紀略」(横山由清・安政4)の項(『明治文化資料叢書』第九卷「翻訳文学編」、昭47・9・10、同刊行会編、風間書房)参照。

- (3) 『法華経』下(坂本幸男・岩本裕校注、'91・6・26、ワイド版岩波文庫43) 264ページ。
- (4) 『南総里見八犬伝』(小池藤五郎校訂、全一〇冊、'84・11・15〜'85・8・15、岩波書店)による。
- (5) 『法華経』(坂本幸男・岩本裕校注、上・中・下、'91・6・26、ワイド版岩波文庫41・42・43)参照。
- (6) 高田衛『八犬伝の世界 伝奇ロマンの復権』(昭55・1・15、中公新書595)
- (7) 注(3)『法華経』下262ページ以下。
- (8) 「天うつつ浪」を主題・形象・文体すべての面で「失敗作」と断じる論としては、井田卓「『天うつつ浪』ノート」(氷上英廣編『ニーチェとその周辺』昭47、朝日出版社)参照。  
露伴という「もはや縁遠い文化で育まれた存在」の変換を明らかにし順序だてることは手に余る不可能事であるとして、柳田泉『幸田露伴』(昭17・2、中央公論社)の聞き書によって全体のモチーフを見定めている。
- (9) 野田又夫責任編集『世界の名著22 デカルト』(昭24、中央公論社)野田又夫訳「方法序説」参照。
- (10) 注(3)『法華経』下264ページ。
- (11) 理想社『ニーチェ全集』第九卷『ツアラトウストラ』(吉沢伝三郎訳、昭44・11・15)参照。
- (12) ローマ神話で工芸・芸術・戦術・知恵の女神。フクロウを伴い、ギリシャ神話のアテナ Athenaと同一視されている。フクロウは知恵と魔女の鳥とされる。
- (13) 露伴に人生のダーク・サイドへの嗜好が欠けている、とする論として、三好達治「露伴さん雑記」(『新文学』昭22・10特集「露伴文学」参照)。
- (14) 露伴「不兎罕山」以下四作(大13・11〜大14・4『改造』)。
- (15) 露伴「閑窓偶筆」(大14・2、『思想』40号)中「西遊記の作者」「東方朔とマンモス」「蘇武と野鼠」「欧亜に跨る狼」など。

- (16) 慧立・彦棕・長澤和俊訳『玄奘三蔵 大唐大慈恩寺三蔵法師伝』(昭63・10・15、光風社選書) 参照。  
 太田久紀『玄奘三蔵訳 唯識三〇頌 要講』(平1・9・29、中山書房仏書林) 参照。  
 湯浅康雄『玄奘三蔵』(平成3・11・19、さみつと双書、名著刊行会) 参照。
- (17) 横山紘一「心の構造——唯識論を中心にして」(岩波講座 東洋思想 第10巻「インド仏教3」) III 「インド仏教思想の特質(続)」、89・10・25ほか参照。  
 なお阿頼耶識 *alaya vijñāna* とデカルト・ニーチェの思想、および華嚴思想・ゾロアスター思想との関連については、井筒俊彦『東洋哲学』(井筒俊彦著作集) 9、'92・8・20、中央公論社、特に、IIの五「理事無礙・事事無礙——存在解体のあと——」(二七) 一一三〜一六四ページ、および、IIの八「禅的意義のフィールド構造」の「一、私の自覚——問題の所在」三二〇〜三一五ページ参照。
- (18) 「如是説」という訳は登張信一郎(竹風)訳『如是経序品』(大10、星文館)に先立つ。  
 注(1)理想社「ニーチェ全集」『別巻』中、吉沢伝三郎「ニーチェ文献」「続ニーチェ文献」(吉沢伝三郎訳、昭50・8・31)参照。  
 注(2)柳田泉『幸田露伴』「天うつ浪」三六二ページ参照。
- (19) 露伴と奥日光・日光華嚴の滝・華嚴経については、拙稿「露伴〈風流〉考」(北海道武蔵女子短期大学紀要・第二十七号、平成7・3・31)参照。  
 水についての露伴の趣向は魯敏孫漂流記をまつまでもなく、「露団々」(明22・2・17〜8・4、「都の花」2巻9号〜4巻20号)の「ブンセイム致富譚、「いさなとり」(明24・5・19〜11・6、新聞「国会」)などに著しく、江戸湾—東京湾をめぐる南北の方位軸は曲亭馬琴の海防思想と重なる。——以下を参照。  
 水谷不倒編『列伝体小説史』(明30・5、春陽堂)下巻第二章「曲亭馬琴」(暁霞居士)  
 石川秀巳「関八州秩序の光源 南総里見八犬伝」ノート(『江戸文学』第一号、'93・10・30、ペリかん社)  
 小谷野敦「八犬伝の海防思想」(『江戸文学』第一号、'93・10・30、ペリかん社)  
 高島俊男『水滸伝と日本人 江戸から昭和まで』(91・2・20、大修館書店)



- (20) 単行本『天うつ波』第三の口絵は鈴木華邨。白鷺とお龍らしい人物を画いている。形も龍も、道教や修験道にちなむ名である。二瓶愛蔵『露伴・風流の人間世界』（昭63・4・20、東宛社）第一章 初期露伴の風流の問題——「風流魔」の発想と挫折をめぐつて——の三を参照。
- (21) アポロンのと対をなす概念としてニーチェ『音楽の精神からの悲劇の誕生』（1872・1）において提出された。同書はのち題名を『悲劇の誕生、あるいはギリシャ的精神と悲観主義』（1888）と変更され、『悲劇の誕生』として知られる。理想社『ニーチェ全集』第二巻『悲劇の誕生』（塩屋竹男訳、昭38・3・25）参照。
- (22) 塩谷賛『幸田露伴』上（昭40・7・30、中央公論社）「郡司大尉」「父母まで」参照。  
『新潮日本文学アルバム68 幸田文』（95・1・10、新潮社）参照。
- (23) しばらく『古事類苑』「宗教部」六〇「仏教」六〇「浅草寺」の項によって引く。  
〔鎌倉管領九代記 七〕浅草観音堂草創（中略）浅草寺と申すは、人王卅四代、推古天皇の御宇に草創あり、本尊は聖観音、関東最初の伽藍、靈験無双の勝地也、（中略）土師氏の支胤、漁家に落て、此川辺に棲けり、檜熊、浜成、竹成とて、三人あみを携え、七浦を遶りけるに、生身の観音薩埵、あみに罹りて、水中よりあがらせ給ふ、（下略）
- (24) 注(3)『法華経』下参照。
- (25) 注(3)『法華経』下特に二一八ページ以下参照。
- (26) 昭和二四年版の岩波書店『露伴全集』「別巻下」の「著作年表」による。架蔵の『心のあと 出廬』には奥付がないが、三三二ページあり「著作年表」と一致する。
- (27) 「引」にいう、「出廬一部四編、（中略）これはこれ予が将に世に出さんとする詩集心のあと全巻の序として看る可し。」
- (28) 注(2)柳田泉『幸田露伴』『天うつ波』三四六～三五二ページ参照。
- (29) 注(15)「閑窓偶筆」。「将棋雑考」（明33・9～11、『太陽』6巻11号～13号）、「雲南」（昭13・9～11、『革新』1巻1号～3号）参照。
- (30) メアリー・ボイス・山本由美子訳『ゾロアスター教——三五〇〇年の歴史』（83・9・30、筑摩書房）参照。

（一九九六・三・一五）